

風光る5月、1日に何度となく空を見上げる。東北で最も心地よく気持ち前向きになる季節だ。人になぞらえれば高校から大学の時期だろうか。「五月病」の名はあまり耳にしなくなったが、キャンパスで学生の表情が気になる月でもある。「この学びを選んで正解だったのか?」ともややもやした思いを抱える若者もいるに違いない。

私も45年前の春、そんな悩みの中にいた。地球科学を目指して大学へ入学したものの、級友たちの学識に圧倒されて居場所を見つげられず、他大学を再受験することも考えた。幸い、オンボロ寮で気の良い仲間恵まれて気を取り直すうち、やがて「学び直す」形で地理学に巡り合い、その面白さを知った。さらに卒業後は、新聞記者として「新幹線」というテーマを見いだし、その手ごわさを克服するべく働きながら大学院へ。何とか博士号を取得し、縁あって50歳の時に今の職場に身を移した。

座標



振り返れば苦境を「学び直し」で乗り越えてきたと言える。

この春も新たな学び直しが始まった。社会学部からソフトウェア情報学部へ移籍し、人工知能(AI)に本格的に向き合うことになった。世界のソフト開発者が集うプラットフォーム「GitHub」(ギットハブ)にアカウントをつくり、よちよち歩きで「コマンド(指示方法)」を覚えるうち、大型連休はあつという間に過ぎた。その指南役はAIだった。

先月、AIが制御する中国の人工型ロボットが人間を上回る記録でハーフラソン大会を制したと報

人とAI補い合う関係

じられた。他方、米国の超大手情報技術(IT)企業は相次いで、AIを理由とした大量解雇を発表し、波紋が広がっている。「学生たちがレポートでAIの言葉を丸写しした様子で…」と同僚のため息も絶えない。私たちはどこへ向かわされようとしているのか。

ただ、「AIにできないこと」ははっきりしている。人類が残してきた膨大な知的資産で、デジタル化され、ネットに掲載されているものはわずかだ。AIと対話してみると、「AIの地平線」が存在することをAI自身も認める。

加えて、ハードルが高い分野もある。例えば、私が住む青森県津軽地方の方言・津軽弁は「最も難解」とすら評される上に、AIが利用できる音声の学習データが少ない。弘前大の研究者が翻訳システムの開発を今も進めている。

何より、人間が「現場」を訪れて初めて手に入れられる情報は少なくない。私自身は古巣の社会学

青森大ソフトウェア
情報学部教授
榎引 素夫
(青森市)

部の授業で「AIには決してできない調査をどう確実になし遂げるか」を説き、ソフトウェア情報学部では「AIをどう駆使し社会とつなぐか」を学生とともに学びつつある。いわば盾と矛を両手に持つ立ち位置にいて、二つの営みは補い合う関係にあると実感する。

パソコン登場、ネット社会到来に続くAIの大きなうねりの中、人が生きること、学ぶことの意義が問い直されている。だからこそ、学生も大人も「学び直し」と「社会のつくり直し」を試み続けるしかない。その努力こそが活路を切り開き得ると信じる。

「学び直し」が必要